仕事と信仰

仕事への真の情熱は自分でなく神様を喜ばせ他人を助けること

Lightプロジェクト「信仰と仕事ワークショップ」

クレースシティーチャーチ東京（福田真理牧師）信仰と仕事ミニストリー「Lightプロジェクト」（ディレクター・サックス知子）の「信仰と仕事ワークショップ」聖書からの「働き方改革」シリーズ3が1月19日、東京・文京区本郷の貸会議室で開かれた。今回は聖書の贖い・回復の個所と、ティモシー・ケラー著『この世界で働くということ』（いのちのことば社）の最後の部分から、「仕事への〝真の情熱〟とは?!」のテーマで開催された。（2018年8月5、12日号、10月7、14日号で既報）

◇　◆　◇

最初に一般社会で働く李智妥（り・じみん）さん、Fさん、クリス・トゥルーターさんがスピーカーとして立った。

李さんは東京生まれの韓国人で、都内の法律事務所で事務員として働き始めて4年目。初めてワークショップに参加した昨年3月頃は「職場でスランプの時期を迎えていた」と話す。「仕事にスピードや正確さが求められるのに対しケアレスミスを重ねて失望する時期だった。これはよくない、これを変えていかなければいけないと思っていたので、『～してはいけない』と命令の言葉で縛り、過度に緊張感を高めていた。事務所で大きな仕事が進んでいたこともあり、いろんなことに敏感に反応し、仕事のパフォーマンスを落としていくという悪循環に陥っていた。自然と自己肯定感も低下し、自分の心の中に無価値さが生じていた」

「問題は究極的な対象を人間関係に置いていたこと。良い仕事をしたかった、よく働きたかっただけなのに、『間違えないように』『失敗しないように』『上司を失望させてはいけない』という思いに変わっていた」

最後に「主は正義と公正を愛される」（詩篇33・5）を引用し、「仕事で、職場で神様のわざを見ることはすばらしい。義の太陽である神様に向かって、神様を仰ぎ入に仕えることが、私が世で働くことだと考えている。主の完璧な、喜ばしい、すべての終わりのゴールを期待しながら、東京という地で働きたいと思って

クリス・トゥルーターさん

李智妥さん

自分の偶像や罪に心が支配されていたかに気づかされたと言う。「私の偶像は、良い人であったり、他人から良い人と思われたいという評価を気にするところにあった。一方、自分のクリスチャン像を作り上げ、自分の物差しで判断し、自分の思いに反する行動をする人を裁いていた。しかし、このコースを受けていくうち、超えられない人間の罪の部分をいのちに代えて贖ってくれたのがイエスの十字架であることも再確認できた。職場で現れる自分の偶像と罪深い部分も、イエスの十字架で洗われていることが認識でき、苦しかった心がすっと軽くなった」。「今は、『欠けが多いからクリスチャンです』というふうに変えられ、心が解放された。神様から今の場所に遣わされた意味を考えながら働くようになりつつある」とも証しした。

多様な職業の参加者が集った

トゥルーターさんは、医療機器メーカーにおいて営業、マーケティング及び技術サービスマネジメントの分野で18年間働いた。日本での教師経験は11年になる。

「仕事への情熱は、会社への情熱と異なる」と語る。「私の情熱は次第に地位、より高い給料、同僚から尊敬されることへ置き換えられた。よい給料を稼いだにもかかわらず、自分の仕事、上司、人生に満足しなかった。クリスチャンとして罪悪感、恥も感じていた」

3年前、会社の社長が突然解雇され、自分が暫定社長に任命された。「給料が2倍になり興奮した。やっと成功できたと思った」とトゥルーターさん。だが4か月後、アメリカから新しい社長が赴任。「がっかりした。自分にぴったりの仕事なのに、神様はなぜこの仕事を与えてくださらなかったのか理解できなかった」

祈る中、「主を自らの喜びとせよ。主はあなたの願いをかなえてくださる」（詩篇37・4）の御言葉が与えられ、「私は主のためにではなく、自分のために喜んでいた。だから、仕事の情熱を失っていたことに気づいた」という。

その後、「自分の情熱は他人を助けることだ」と気づいたトゥルーターさんは、会社を辞めてコンサルタントビジネスの会社を起業。「今、感謝なことに私のビジネスは成功している。自分ではなく、神様を喜ばせ、他の人々の成長を助ける方法に心をくだいたからです」と語った。（つづく）

URL www.lightproject.jp

【中田　朗】

聖書からの「働き方改革」シリーズ3（上）